

Title	平井正穂著『イギリス文学試論集』 研究社 昭和40年(1965年)
Author(s)	藤井, 治彦
Citation	Osaka Literary Review. 5 p72-p.78
Issue Date	1966-07-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25772
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

平井正穂著『イギリス文学試論集』

研究社 昭和40年(1965年)

藤井治彦

I

これは平井正穂氏が1948年(昭和23年)から、1965年(昭和40年)迄に書かれた二十二の評論を集めた書物である。その主題は文学史の問題、シェイクスピア、エリオット、現代の詩と批評の四つに大別される。それらの評論は、与えられた機会に書かれたものが多いようであり、ひとつひとつの長さも、少数のものをのぞいては、比較的短いが、それぞれ深い問題をふくんでいて、いかにも試論集の名にふさわしい。又そのすべてのものを通じて、その時々の特定的問題のかなたに、平井氏の歩みが一貫したあざやかな心象として読者の心にその影を映すのである。

これらの評論を、それぞれの分野において学問的に評価することは私の力の限界をこえたことであるが、一方、仮にそれができたとしても、そのような読み方のみが、著者の心から喜ばれる唯一の読み方であるとは考えられない。平井氏はこれらのエッセイの多くは、「自分の心の記録として捨てがたい気がする」(p.309)と語っておられる。そして又、比較的古いいくつかの論文には、その発表当時の、資料を手に入れるのもむづかしかった事情を回顧する注をつけ、十分説きつくし得なかった点については、将来の補正を約束しておられるのである。そうしてみると、むしろ平井氏の謙虚な言葉にあまえ、これらの評論を貴重な「心の記録」として著者と共にたどることも読者のよろこびであり、この書物の実り豊かな読み方のひとつであろう。

これらの評論は、キリスト教を信じる家庭に生れ(p.16, p.213)、少年時代からイギリスの詩を愛読し(p.213)、1930年代に「純粋な学問的意欲に燃えて」(p.276)イギリス文学研究をはじめた一人の学徒が、第二次大戦によって「敵としてイギリスとその詩人たちを眺め」(p.4)ることを強いられ、その大戦によって「圧倒的な影響」(p.4)をうけ、イギリス文学と自分との間の異質感にくるしみ、戦後、1949年には、「単なる学問的な好

奇心から、西欧のものを読む意志はもうもたなくなっていた」(p. 225)とまで言うようになりながら、1950年代のなかばには、「‘scholar-critic’の可能性」(p. 253)を考えるようになり、やがて、1960年代に入って、「世界文化」(p. 139)の可能性を見出すに至るまでの長い歩みを背景としているのである。われわれは、この著者の歩みを特定の過去にのみ属する現象と考えるてはならないであろう。この歩みは日本の英米文学者にとってはひとつの課題であり、より若い世代に属するわれわれも、これをひとつの現在の問題として受け止めなければならない。

II

これらの評論のすべてを通じて平井氏の思考は常にいくつかの主要な問題を深い重心群として底にひめている。それは平井氏がエリオットについて指摘している現象(pp. 130—131)と似ているのであって、ある特定の状況において語られた言葉が実は平井氏の一貫した思考の体系の中に位置を占めるものなのであり、より深い問題にかかわっているものなのである。

平井氏における諸問題の根底をなすのは、西欧と日本との間の異質性と同質性の問題であろう。平井氏はこの問題を人間性の問題として捉えるところから出発した。1948年から1950年にかけて書かれた評論はいずれもこの人間性の問題を中心としている。「人間性の問題——T. S. エリオットについて」において、平井氏はイギリス文芸復興期の作家達にもエリオットにも人間性の理解についてひとつの限界があり、彼らのいわゆる人間とは、彼らそれぞれの信じるキリスト教の枠内での人間であり、その外側の人間を人間として認めていないことを指摘する。そして、これに対して平井氏は、かかる限界をもつ人間性の理解をこえて、すべての個人の魂を尊重するところから、すべての人間をつなぐ人間性を明確に主張すべきであると説いている。「イギリスの若い詩人たち」では、彼らが人間性への参加にその身命を賭したことが高く評価され、同時に日本人の側における反省も「大いなる人間性の基盤に参じているという自覚」(p. 228)がなかった点にむけられている。

このような平井氏の人間性についての思考は、日本人の大多数が異教徒であり、日本文化がキリスト教文化の外側にあるという事態を基盤としている。この点について、われわれは、平井氏の微妙な立場に気付くのであ

る。平井氏は日本人であると共にイギリス文学研究者であり同時にキリスト教を信じる信仰者でもある。したがって平井氏の「われわれ」という言葉には、氏自身も認めているように、独得の意味がこもる。平井氏が「われわれ」という時には「多くの場合、自分自身を除外した多くの同胞人を意味しているが、時には、自分自身だけのことを意味している」(p.16) こともあるという。この「私」と「われわれ」との間の断絶感が平井氏を苦しめた。「私は、故郷を喪失した人間なのであろうか。」(p.213)「私は自分自身の内部に二つの自己があるのを感じずようになった。イギリスの詩をよみ、キリスト教を信ずる、モラリストとしての私。それからもう一つの諦観的な、虚無的な無道徳な私。」(p.215)と平井氏は言う。人間性とは、一方にイギリス文学とキリスト教を、他方に日本的感性と虚無をおくこの分裂を、信仰を包摂しつつ、統一するべき基盤なのである。平井氏の人間性への信頼は今日に至るまで根本的にはゆるがず、「世界文化」についての氏の思いの根底をなしていると考えられる。次の問題はイギリス文学に日本人が接する時に生じる、理解と体験の相違の問題であった。これは、人間性の問題よりややおくれて、1954年頃からあきらかな形をとって生じている。ティリヤードについて、「一つの言葉、一つの句、一つの状況に対する彼の反応を、自分自身の反応と対応せしめつつ、彼我の体験内容や詩的感受性の類型的な相違」(p.255)を考えることが問題となっているのはそのあらわれと考えられる。同じ頃、講義においても講義でとりあげる問題に関する知識と、その問題に対する主体的な決意の関係が問われている(pp.262—263)。そういう問題は、別の言葉でいえば、イギリス文学の「基本語(key-words)」であり「基本的主題(key-themes)」(p.267)であるような言葉を、われわれが、抽象的に単なる知識として理解するのではなくして、「なんらかの形で自身の体験を包摂」(p.270)した形でどこまで理解できるかという問題であった。まことに著者のイギリス文学研究は「これらの言葉の『定義への』努力」であり、それは又、「自分というものの意味の探究」(p.268)でもあった。それ故に著者は、ある種の言葉、「社会」(pp.265—266)、「ヨーロッパ文化」(pp.132—135)、「知識階級」(p.294)などの文明批評の用語、「自然」(p.7, pp.267—275)、「無常感」(pp.61—62, p.68)、「過去、現在、未来」(pp.131—132)、「孤独」(pp.59—60)、「愛」(p.7, p.267)、「想像力」(p.267, p.304)

などの文学上の用語、「伝統」「正統」「教会」(p. 141)、「罪悪感」(p. 11)「恩寵」(p. 15)などの宗教用語，“decency” (p. 286)，“surrender” (p. 142)という単語を用いる時に、慎重な意味の計量を試みるのである。さらに、シェイクスピアについて、「彼の描く一つの心象、一つのせりふ、一つの場面のもつ意味の多義性とわれわれの側におけるそれらの受けとめ方の示す単義性の対比」(pp. 64—65)を考える場合にも、エリオット論の中で、ヨーロッパ文化を論じて、「彼らにとって生活感情となっているものが、私には単なる、抽象化された認識の対象にしかすぎないことを知って私はしばしば愕然とする」(p. 131)という場合にも、理解と体験の間の深い断絶が姿をあらわしているのである。

しかし、平井氏は、この断絶に対して、必ずしも絶望的になってはいない。氏は、シェイクスピア論の中で、「人間というものは西欧人は西欧人なりにその独自の方法と論理で、東洋人はまたその独自の方法と論理で、何か普遍的なものを、あらゆる人間に密着している何か根本的なものを、心象化するという性格をもっているのではないだろうか」という考えに立って、そういう心象を「人間そのものに必然的にそなわっている何ものかの現われ」と考え、西欧の心象についても、「それらが自分の内側にある感受性に響いてくることを信じたいのだ」(pp. 58—59)という美しい希望に達しているのである。

1960年、平井氏は三つのエリオット論を書く。その中で、以前の問題は「世界文化」の問題へと発展してゆく。エリオットのヨーロッパ文化論を批評し、「だがもし問題を単にヨーロッパ文化という限られた世界から、われわれをも含めた意味での世界的なものに拡げていったらどうなるか。……世界的 (global) な視点にたつ限りヨーロッパは一つの地方 (province) にすぎない。真実に普遍的なロゴスとしての知恵は、真実に普遍的な人間のコンテキストの基盤の上において求められなければならない」(pp. 135—136)という発言が行われた時に、あるひとつの進展があったといえよう。その年第二のエリオット論「エリオットの文化論その他について」では、エリオットの用語をわれわれの文化的伝統にもちこむことはほとんど絶望的であると述べた、その後後に、「ただ、未来において、ヨーロッパ文化もわれわれの文化もそれぞれの地方性を脱して、一つの『世界文化』に……融合する可能性を信ずるならば」(p. 139)そこにエリオ

ットの真の理解が可能かもしれぬという希望がのべられる。そして、この時、同時に、「もし文化を一応宗教から切り離し、人間性という文脈において扱えたならば、単なる世界連邦といった機構とは違った基盤の上になつ『世界文化』が考えられようと思う」(p.139)という意義深いひとつの宣言がひそやかになされているのである。かくして、平井氏は、「日本におけるイギリス文学研究」を考える時、第二次大戦以来、長年にわたって氏が抱いていたイギリス文学に対する異質感が、この世界文化という「かなり平衡と安定のとれた感覚」に「しずかに、ゆるやかに」(p.5) 定着したという確信を述べられるのである。平井氏と共に氏の「心の記録」をたどってきた読者は、ここにいたって、さわやかな感動を感じるであろう。氏は今、イギリス文学と日本人との間の「人間的コンテキスト (human context)」(p.22) が最終的には普遍的なものであることを信じて、「同一性というコンテキストにおいて異質性をとらえ、異質性というコンテキストにおいて同一性をとらえる」(p.8) という形において、異質性を徹底的に追究し、しかもそのかなたに同質性を体験すること (p.6) を自らの課題とされているのである。1965年の「エリオットの詩」の中で、「燃える」という心象を論じたあたりに、この方向にそった新しい前進がうかがわれるように思うのは私のみであろうか。

III

この書物を読みおえて、私には二つの問題が心にのこった。ひとつは文学研究上の問題であり、他のひとつは信仰上の問題である。平井氏は氏のイギリス文学史の構成を説明して次のように言われる。「私にとってイギリス文学史の構成は、三重の構造をもっている。第一は純粹に審美的な次元であって、この文学的なコンテキスト (literary context) における、作品への沈潜ないしは自己埋没なくしては私の作業は文学の名に値しない。第二は文化的コンテキスト (cultural context) における、作品と作者のもつイギリス文化史的背景の理解である。作品や作者に表明されている人間観がなんらかの西欧的思想体系や世界観の範疇にくみ入れられる限り、私はやはりこの次元で扱いうると思う。第三は私のいう意味での人間的コンテキストである。イギリスの文学と私はこの次元で一番深い交渉をもつ。偉大な作家が文化的コンテキストでなく、つまりなんらかの思想体系に選

元されるのでなく、生のままの生きた人間の実体を私に実感させてくれるのはこの接触を通してである」(p. 24)。この一節は文学史に関するばかりでなく、イギリス文学一般についての平井氏の態度をかなりよく要約していると思う。この三重の構造が決して機械的に切りはなせるものではないことは平井氏自身も認められるであろう。それにもかかわらず、人間的コンテキストにおける同質性の体験を余りに重視することは、人間性にかかわりあるもののみを本質的なものとして他の要素から不自然に切りはなすことになりはせぬかという危惧を感じるのである。平井氏の中に文化的コンテキストにおける問題意識が欠けているとは、私は決して言わない。それどころか、平井氏が理解と体験の問題を真剣に追究されたことは前にのべた通りである。しかしなお、私は、平井氏に、氏の「言葉の定義についての覚え書」をより体系的な形で発表していただきたいと思うのである。

そのような研究は、一方、平井氏からわれわれに与えられた課題でもある。そのような研究は、もとより、彼我の異質性を十分に意識し、しかも人間的コンテキストにおける同質性への希望に支えられたものでなければならぬ。平井氏においては、痛いまでにはりつめているその緊張を欠くならば、われわれの研究は座標を失った職人芸となるであろう。しかし、一方においては、その研究の途上では、ひとたびは意識的に人間的コンテキストの問題を忘れ、あるいは論じ得ざることとして括弧の中に入れ、もっぱら、文化的コンテキストの瑣末な細部、人間的コンテキストからみればおよそ非本質的な細部に執着することも必要となるのではあるまいか。理解は理解とし、体験は体験として一応の区別をする段階が必要なのではあるまいか。日本人であり、イギリス文学者であり、かつ信仰者であるという状況、いわばマージナル・マンである状況は、そのような段階では、決して否定的のみには働かず、むしろ豊かな可能性を含むものになり得よう。文化と福音は必ずしも対立、相剋の相においてのみとらえられるものではないと私は思うのである。又、別の角度から考えると、人間的コンテキストにおける体験はそれ固有の表現が可能なのであろうかという疑問が生じる。表現という段階では、文化的コンテキストに回帰せざるを得ぬように感じるのである。それは必ずしも、文学を「なんらかの思想体系に還元」することではないと思う。

第二の問題は、世界文化と信仰の問題である。平井氏は、最初、世界文

化の考えに至った時、「もし文化を一応宗教から切り離し、人間性という文脈において扱えたならば」(p.139)という条件をつけられた。この条件は最後まで世界文化についてまわるのであろうか。別の言葉でいえば、世界文化が成立した時、日本のキリスト教は、日本および日本人に対して、どのような位置を占めるのであろうか。人間性という言葉は、実に曖昧であり、安易な意味にとられやすい。われわれが日本人に対して、日本人なるが故に親しみを感じるという時、あるいは、異邦人に対しても、日本人に対しても、お互いに人間なのだからという発想から低次の理解を求める時、人間性という言葉は、鈍い、卑俗な、虚無的な情緒の中にその本質を失ってゆく。平井氏の人間性の概念をそのような安易さから峻別しているものは、平井氏の信仰であり、平井氏の人間性が、キリスト教的人間観に支えられた概念、何よりもまず「個人の魂と神との交わり」(p.99)を前提とする概念であることである。信仰が普遍的な人間像と一致することは願わしい。しかし、その前に、キリスト教的人間観と日本の精神的風土の中に育った人間観との間に如何にして相互理解が可能なのであるか、さらに平井氏の意見をきかせていただきたく感じるのである。後期のエリオットを評して、「自分の信仰の探究の道を見つけた者が、その道が普遍的な人間性に即したものであることを確かめようとしている」(p.202)と言われた一句に、私はこの問題に対するひとつの鍵を見出すのであるが、世界文化における人間性と宗教の問題について、なお一層の説明を平井氏から求めているのは、私のみではあるまいと思う。

これらの点が、この書物に対する私の感想であるとともに、そこから私が課題として受け取った問題であることは言うまでもない。このすぐれた「試論集」から、読者は、それぞれに、さまざまな問題をうけとることができるであろう。その意味においても、この書物を持つことは、われわれの大きなよこびであり、この書物は、特に、平井氏よりも若い世代に属する者の必ず読むべき書物であると思う。

(1966年1月)